

「母と娘」

— キンモクセイの咲くころに —

前半のあらすじ

主人公（あや）は小学三年生の頃から父と母の三人で長野に暮らし平凡で幸せな毎日を送っていたが、母（沙夜）の人形作家としての仕事で忙しくなるにつれ、次第に幸せだった毎日が崩れていくことに不満を感じていた。そんな中、父（弘）が病気で倒れ、あやは幼い頃に亡くした祖父の病氣と同じであることを思い出す。

あやは母が仕事に没頭しすぎたため、だと責め、沙夜は人形を作ることをやめるが、父は酒を頻繁に飲むようになり、なかなか母の言うとおりに健康的な生活を送ろうとしない。そんなある日、酒に酔った父が自分の茶碗を割ってしまう。あやは楯に入れたられた祖父が家から運び出されるときに祖父の茶碗が割られたの思い出し、このまま何もせずにいると父を失ってしまうのではないかという

小 林 名 津 美

不安に駆られ、思い切って学校を休み、長野から父の母である祖母の住む北鎌倉へ助けを求め向かった。

* * *

おばあちゃんはわたしの突然の再訪に驚いたけれど、快く迎えてくれた。

「あや、学校はどうしたの？」

さつきまで喜んで抱き寄せてくれたおばあちゃんは、少し冷静になったのか、お茶を沸かしながらそう言った。

「実は、おばあちゃんに頼み事があって来たの。今じゃないといけないから。だから、今日は学校を休んだの」

わたしは、耳が遠くなった祖母にできるだけ聞こえるように、

はつきりと大きな声で、祖母への頼み事を話した。

父が祖父と同じ病気になりそうなこと。そうなったのは、母が仕事で、ちゃんの家事をしていなかったからだということ。そして、人形を作るのをやめた母は毎日健康的な食事を作っているけれど、父はお酒を飲む量がふえてあまり健康になろうとはしないこと。そんな父を母は注意したけれどもうまくいっていないこと。少しずつ平和だったはずの毎日がぐずれて、ぎくしゃくして、どうしたらいいか分からないということ。わたしは、一つ一つ説明した。

「だから、お父さんを止められるのは、おばあちゃんしかいないと思つたの。おばあちゃんは、お父さんのお母さんでしょ。きつとこのままお母さんが言つたつてお父さんは聞かないし。おばあちゃんに注意したら、お父さんも言つたことを聞くと思つたの」

もし、このままの状況が続けば、さらに悪いことが起こつてしまふかもしれない。だから、おばあちゃんが分かつたと言つてくれるように、わたしは必死におばあちゃんの顔を見ながら言つた。

「じゃあ、とそれまで静かに聞いていたおばあちゃんは、お茶をすすりながら口を開いた。わたしは、これだけ必死に懇願しているのだから、その後が続くのはきつと、」
「じゃあ、行こうか」とか
「じゃあ、言つてみようか」とかそんな言葉を願いながら、ゆつくりとお茶を飲むおばあちゃんを待った。

「じゃあ、あやは言つたのかい？」

「えっ」

まっすぐ見据えたおばあちゃんは、いつもの穏やかな表情とは違つて、少しきりつとして、わたしをたしなめるように見ている。

「言つて、ない。わたしが言つても同じことだと思つた。それに、」

「それに、言いに、いからだろ」

おばあちゃんは、わたしの湯飲みを引き寄せ、急須のふたの上にとつと手をのせゆつくりとお茶を注ぎながら、少し眉を下げて困つたような顔をしてやさしく笑つた。

おばあちゃんにかかればなんでもお見通しだ。正直いうと、わたしは父に同情していた。父が煙草を吸つてた理由も、釣りに行つてた理由も。煙草は、母やわたしを養うために働いている疲れを癒すためだつたと思つた。釣りは煙草でも読書でも得られない、何かを釣り上げたという楽しさからだつたと思つた。だから、その二つができない今は、お酒で補うしかないのかなど、思つた言いに、いにくのだ。

「おじいちゃんの時はね、もう遅かつたの。だいぶ病状が悪化して、倒れてからずつと入院して、家に帰ることなく死んじやつて

ね。もう十年経つけど、今でももつと早く気付いていればなあって、どうして気付いてあげられなかつたんだろうって思うんだよ」

おばあちゃんは、居間に飾つてあるおじいちゃんの写真を見ながら、そつつぶやいた。

「それは、おばあちゃんだけじゃなく、みんな口にしてた。でもね、倒れるまでは、病気だなんてちつとも気付かないぐらい元気でね。昔つから自分の弱いところを人に見られるのがいやだったのよ。だから、きつと弘もそんなおじいちゃんの性格を受け継いだのかも shouldn't ね」

おばあちゃんは、寂しそうな、でも少し微笑んでいるような顔をしながら、話した。

「受け継いだら、困るの。早くなおさないよ、なんかみんなおかしくなつちゃうよ」

わたしは、その時ばかりはのんびりと祖父の話を聞いてはいられなかつた。早くしないと、早くいかないと、気持ちばかりがあせつた。

「そのうちしたら、きつと弘もお酒をやめるさ。でも、あやが心配してるのは、もつと別のことにあるんじゃないのかい」

おばあちゃんは、焦っているわたしとは反対にとても悠長な姿勢で構えて言う。

別のこと、別のことってなんだろう。わたしが心配していること、それは一体なんなのだろう。ゆつくりと思いをめぐらせてみる。

父がお酒をやめれば、また母は笑つて、わたしも家に居づらくなくなるのだろうか。父が元気になったら、また父も笑つて、母も笑つて、わたしも笑うのだろうか。そもそも、わたしの言う「ほんとうに笑うこと」って一体なんなのだろう。

長野に越したばかりのときは、わたしは父と母と一緒に過ごすのが楽しくて仕方がなかつた。三人で囲んだ、あの落ち葉の暖炉や、わたしと父が雪で遊んで、それをスケッチする母、三人でキンモクセイの花の香りをかきながらここに住もうと云つて、それから新しい家をどんな風にするか、荷造りをする手を時々とめながら話したこと。

あのときは、ちゃんと父も母も、そしてわたしもとても楽しくて、毎日生き生きとしていた。それなのに、どうしてこんなことになつたのだろう。一体いつから変わってしまったのだろう。そう考え出したら、頭の中にひとつ浮かぶ。

「白い箱。白い箱が増えたからだよ。白い箱が増えたから、みんなおかしくなつた」

「白い箱？」

おばあちゃんは、きよんととして、わたしを見る。

「お母さん、人形作ってたでしょ。それがあの家に引越してからだんだん人形の注文が増えて、それでおかしくなったんだよ。お母さんが人形さえ作ってなかつたら、こんなことにはならなかつた」

だんだんと声が震えてくる。母は、茶碗が割れて泣いていたけれど、それも自分のせいだと気付いて泣いていたのか。それともまだなんにも気付いてないのだろうか。

「あや」

ぴしゃりとした、おばあちゃんの声が静かな台所に響いた。

「なにか嫌なことが起きるとね、みんななにかのせいにしたくなる。でも、物事の原因は、いつも一つじゃ収まりきれないもんだよ。確かに、沙夜さんは、人形作りに熱中していたかもしれないけど。それが沙夜さんの仕事で、弘はそれを分かつて一緒になつた。そんな中で、弘もなにか鬱憤がたまっていたかもしれないけど。今回倒れたのは、すべて沙夜さんが人形を作ってたからってわけじゃないでしょう」

「じゃあ、どうすればいいの」

わたしは、知らぬ間に涙をぼろぼろこぼしてた。おばあちゃんに

否定されたというのもあるし、わたしはまた母に人形作りを再開させたくはなかつた。もし、引越したばかりほど、人形作りに熱中しなければ許してもいいけれど、そんなことはきつと無理だ。そのうち母はまた部屋にこもってしまう。

「そんなの簡単だよ」

そう言うとおばあちゃんは、忘れてたと言つて立ち上がり、仏間へと姿を消して、お盆に五つぐらいらいどらやきをのせて戻ってきた。

「ちゃんと、話し合つて役割を決めること。弘は適度に働いて、食事を取る。適度に釣りでもしたらいいし、仕事をしている沙夜さんの手助けを適度にやる。沙夜さんは、何時から何時まで仕事をするか決めて、その残りは家事をしたり、あやや弘という」

「じゃあ、わたしは何をしたらいいの」

おばあちゃんの言う役割は、まるで小学校のときのよう、学級員や書記みたいに役割を決めて、それぞれがちゃんとこなすことでクラスがまとまる、と言っているみたいだ。けれど、家族の場合は、みんなそれぞれ事情があるのに、そんな役割のルールが適用するのだろうか。

「あやは、まだ子供なんだからもつと甘えればいいだけ。もつと遊んでとかもつと、こうしたいとか、そういうことを言うのが大事。でもね、加減がすぎると、ダメ。あやももう少し大きくなつたら分

かると思うけどね。

人間は、父親と母親っていう役割をもつと、それを全うしなくちゃいけない。つて、ふつうみんな思うの。父親は、働いてお金を家へいれなければいけないし、母親はちゃんと子供をみて家事をしなければいけないつてね。でもね、それだけの役割だけだと、いくら家族を愛していても、壊れてしまうことが多いの。だから、釣りでもいいし、人形を作ることだっていい、なにか自分だけの楽しみつていうのがあると、自分も人も大切にできるようになる。あやや弘、沙夜さんに足りないのは、その加減をどこまでにするかってことじゃないか、とおばあちゃんは思うよ」

「そしたら、ちゃんとうまくいくの」

おばあちゃんの声がやさしすぎて、涙があふれて、ちゃんと声がない。それでも聞きたい。「きつと」じゃなくて、もつと力強いもの。

「ちゃあんと、うまくいく。だつて、うまくいってないのは、今だけでしょ。前はうまくいってたけど、今はうまくいかない。それなら、前のよかつたところをもう一度やつてみたらいいんじゃないの」

おばあちゃんは、どらやきを二つに割って、美味しそうに食べながら言った。

「ちゃあんと、おばあちゃんのゆつくりとしたしゃべり口調と少ししわがれた声、開け放たれた雨戸からは光がまつすぐと入つてきて、ほかほかと部屋が温まつてくる。わたしは、おばあちゃんの家へ来てよかつたと思った。おばあちゃんは、はじめから簡単には手を貸すまいぞ、という風にわたしをたしなめるように見ていたけれど、わたしが考えていた答えよりも、もつと広くて大きい冬の毛布みたいに包んでくれた気がする。

「そして、おばあちゃんの役割は、孫が来たら喜んでもてなすこと。はやく乾燥しないうちに食べちゃいなさい。またたくさんあるから」

わたしは、おばあちゃんに言われるままに、どらやきをほおばつた。生地は、しつとりとしていて、ちつとも乾燥していない。陽の光で少し温まつたどらやきは、まるでできたてみたいで、甘い粒あんがゆつくりと舌にとけていった。

* 6 *

さつきまで濡れていた頬は、すっかり乾いて、わたしはおばあちゃんと一緒におじいちゃんのアルバムや絵を筆筒から取りだして見た。

おじいちゃんは、眼鏡をかけていて、いつもポロシャツに帽子を

かぶっている。なんだか父とそっくりだ。アルバムをめくると、居間にある写真と同じ「よつ」と帽子をとってカメラを向けた人に笑いかけている写真が貼られていた。

「わたし、このおじいちゃんが一番好き」

と言つと、おばあちゃんも頷いた。日本画を習っていたおじいちゃんは、鎌倉の山や紫陽花、銀杏の大木などを描いていた。山の中の何気ない道を描いた絵は、木々の隙間から差し込んだ柔らかい光が道を照らしていて、ただ緑と土だけでなにも生き物は描かれていないのに、生き生きとしていて絵を眺めているだけでそのままその道へと歩いていけそうだ。

紫陽花を描くにしても、水色や紫、桃色や黄色、いろんな色にじみあつて、一枚一枚の花びらは本物よりもきれいだと思つたし、まっ黄色な銀杏の大木の下には、それを見上げる人が二人小さく描かれている。

「これ誰なのかな」

銀杏の絵以外は、植物や動物しかでていないのに、どうして銀杏には人が描かれているのだろう。

「それは、おじいちゃんとおばあちゃん。おじいちゃんが材木店を始めてから、ずっと忙しいしお金もなくて大変だったときね。いつかお店が大きくなりますようにって、鶴丘八幡宮の銀杏をよく見

に行つたの」

それから、わたしは、おばあちゃんとおじいちゃんの苦勞話を聞いた。まだ、輸入材木が今のように普及していなかった頃、おじいちゃんは独学で英語を学び、単身で外国まで行き交渉をして、輸入材木の卸しの仕事を始めたこと。けれど、それはいつか商社が受け持つて、おじいちゃんのように個人でやっていると、何十年後には歯が立たないことも、全部おじいちゃんには読めていたこと。

「おばあちゃんね、さつき夫婦の役割の話したでしょう」

わたしは、おばあちゃんの顔がさつきよりもずっとやさしくなっているのに見とれていた。おばあちゃんは、いつもおじいちゃんの話をするとき、いつもとてもいい顔をする。

「おばあちゃんの時代はね、奥さんが仕事をもつてことはありえなかつたの。妻は、家事と子育てのみ、つて感じてね。わたしは家事をすることも、子供も大好きだったけど、こうして、おじいちゃんみたいな趣味はなくて、いつもうらやましいなあつて思つてた。家族のために、つて働くことはとっても素晴らしいことだと思つけど、おばあちゃんは沙夜さんみたいな生き方にもあこがれるな」

わたしは、まだよく分からないけど、そんなものなのだろうかと呆然と聞いていた。おじいちゃんは、仕事以外に絵という趣味を

持つていて、母は母という役割を持つていながら、人形を作るという仕事をもつている。

絵も人形も同じような気がするけれど、おじいちゃんの絵にはさみしさがなければ、母の人形はなんだか少しさみしい。なぜ、人形はさみしい気がするのか、と云えばそれは人を模つたものだからなのか、それとも人形を作る母がどこかさみしい気持ちを抱えながら作つているからなのか。わたしは、その理由を知りたくなつた。でも、おばあちゃんに聞いても分からないだろうし、母に「なぜお母さんの作る人形は、悲しいのか」とは聞けないなと思ひ、一人座敷の上でうなつていた。

そのとき、引き戸を叩く音がして、「こんにちばー」と叫ぶ母の聲がした。

わたしは、隣にいるおばあちゃんと顔を見合わせる。学校を休んだことがばれて、母はここまで嘆きつけてきたのだ、と思つたけれど、不思議と顔は笑つていた。おばあちゃんも入れ歯をみせて、ひひつと笑つていたし、学校を休んだ甲斐があつたと心から思える今ではたとえ怒られたとしても全然こわくはない。けれど、わたしはおばあちゃんにしいと人差し指で、わたしがいることをしばらく黙つてもらひ、靴は靴箱に隠し、洋服ダンスや家族の下着、お歳暮にもらつたタオルなどが積み上げられている物置部屋に身をひそめた。

「突然すみません。電話、かけられなかつたので……」

母の声は、少し荒いである。腕時計を見てみると、二時過ぎだつた。洋服ダンスから匂う、防虫剤のナフタレンの匂いで理科室を思い出す。直川先生は、突然休んでしまつたことをどう思つていられるうか。

「どうしたんです。そんなに慌てて」

おばあちゃんは、いつものように悠長にふるまつていゝる。

「あやがないんです。朝起きたら机にこんな置き手紙があるだけで。学校へも行ってないみたいだし、弘さんは一応山を探すつて言つて、わたしはもしかしたらお義母さんの家かと思つて」

わたしは、少し驚いた。母は、もしかしたら来てくれるかもしれないと思つたけれど、まさか父まで仕事を休むとは、思つていなかった。顔が次第にゆるんでくるけれど、もし山道でわたしを探しながら、倒れたら元も子もない。今すぐ、連絡しなければ、と思ひ立ち上がろうとする。

「テストがこわくなつたんですかね。それより、沙夜さんお腹空いてない？」

おばあちゃんの呑気な声とともに、ちよつと今は、とか、そんなことより、という母の慌てた声とそんな母を引きずる床のきしみが聞こえてきて、わたしは笑いをこらえた。

しばらくして、そんな悠長なおばあちゃんに負けたのか、仏間からチーンという音が聞こえてくる。母との距離は、一メートル半くらいだ。目を閉じ、手を合わせている母に飛びついて驚かせたいとも思っただけ、体が動かない。そんなことをするのは、まだ勇気がなかった。

再び息をひそめていると、今度は昆布と鰹節のいい香りがする。おばあちゃんの料理は、いつも香りと音だけでお腹が空く。魚だつて、昔ながらの七輪でいまだに焼いていて、団扇ではたばたと扇くのはわたしの役目で、油がはせる音と炭の匂い、すべてが合わさって食欲を増す。

母とおばあちゃんは、正反対だ。母は、洋風の料理は得意だけれど、和風の料理は苦手。毎日魚でいやだつたのは、母の下処理や焼き具合があまり上手くないというのもある。あの日の秋刀魚をのぞいては。

それとは、逆におばあちゃんは、和風の料理は得意だけれど、洋風の料理は外食のみだと未だに言っている。家だつて、おばあちゃんの家とわたしたちの家は、和風と洋風で正反対だ。わたしは、和風なおばあちゃんの家が大好きだけれど、やっぱりあのキンモクセイの木や母が言ったイギリス国旗みたいな窓も好きだ。

まだ、わたしたちが東京に住んでいた頃は、時々おばあちゃんの

家へ行つて、母はおばあちゃんの料理を習っていた。今は父のために買った料理本の通りに作っているけれど、味がワンパターンだし、いまいちおいしくない。それは、ただ単に料理本や、母の腕のせいだけではなくて、きつと本当に食べたいものや作りたいものを作っていないからだと、今では思う。そして、わたしも父もそれらが本当に食べたいものではなくて、カロリー表で決められたスケジュール通りの食事食べていたからだ。

「沙夜さんは、どうしてあやがいなくなつたと思いますか？」

耳をすますと、まな板と包丁のトントントンという音が聞こえてくる。きつと、お味噌汁にいれる具かなにかを切っているのだ、と思ひわくわくしながらも、おばあちゃんの問いに胸はどきどきしていた。

「それは、わたしが至らなかつたせいだと思います。仕事ばかりして、弘さんのことも、あやのこともちゃんと見れてなかつたから……」

母の弱々しい声が聞こえて、胸がきゅつとなる。けれど、そのあとすぐに大きな溜息が聞こえてきた。

「娘は母に似るっていうけど、本当ですね。うちは、三人とも男ばかりだつたから分らないけど。責任を感じてないのは、弘だけなんで。あきれますね。まったく」

また、大きな溜息。でも、そのあとすぐにおばあちゃんの笑い声が聞こえてきた。

「あやも沙夜さんに似て、どんどん思い詰めて心配しすぎてしまうことがあるみたいですね」

「やっぱりここへ来たんですか？今どこにいるんですか」

ばんと椅子が壁にあたる音がした。家中に響きわたるほどの大きな声が出て、わたしは胸の中にどんどんと膨れあがってくる気持ちをごらえようと我慢した。もう出て行ってもいいのに、安心したのか、おしりがするする下がってく。

「一つだけ忠告があります」

さっきのおばあちゃんのびしゃりとした声がまた部屋を静かにさせた。わたしは、唾を飲み込む。きつと、母も今頃ごくりと喉をならせてる。そう想像すると、なぜか緊張しているのにうれしくなる。

「もう一度、三人で自分たちのこと、考えてみなさい。できるだけそれぞれの負担や我慢が少なくなるように。何が起きても、一人が自分のせいだつて責めないように。一緒に暮らしているんだからお互いのしたいことを尊重しながら暮らしていけないと。そんなんじゃない、もちませんよ」

おばあちゃんの厳しい声がだんだんとやさしい声になって、わた

しはまた泣いてしまいそうになった。わたしは、母に母なんだから、自分よりも家族を優先しろというも思っていた。母があまりにも仕事をしすぎた、というのはあるけれど。あんなにも怒りや憎悪をこめて追い詰めることはなかった。そう、思うと口がむずむずする。このまま姿を現さずに、この物置部屋から「ごめんさい」と叫びたくなる。

「さてと、できましたよ」

そんなわたしとは反対におばあちゃんの呑気な声が聞こえるとともに、香ばしい香りがする。醤油と砂糖のこげたあまい匂い。ぐうとお腹の中の虫が鳴く。体はいつも気持ちよりも正直だ。はやくごはんを食べたいし、母にごめんと言いたい。ううう、とわたしはぐうぐうと鳴るお腹をにぎりしめた。こんなことなら、もつとはやくに出ておけばよかった。そもそも隠れるんじゃない。一時間前までの必死さとは裏腹に、いまは空腹と戦っているなんて、ひどく間抜けだ。

なんだか頭がすずすずする。きつと、ナフタレンのにおい。それとも、きのうあんまり寝ていないせいかな。

台所からは、食器のかちゃかちゃという音がする。昼ご飯が始まってしまふ。わたし抜きで。そう思っていると、台所からわたしを呼ぶ声がした。

「あやー。ごはんができたよー」

おばあちゃんと母の声が重なって聞こえてくる。

こんなところで、うずくもってナフタレンを嗅いでいる場合ではない。わたしは立ち上がり、扉を開け、台所まで走った。

母と顔を合わせるのには、正直恥ずかしい。隠れてたつていうのもあるし、あの発言以来母がこんなに明るい声でわたしを呼ぶことはなかったから。

ゆつくりと顔をあげる。母は、満面の笑みで笑っていた。

「あや。ごめんね」

少し情けなさそうに母が笑う。ゆるいパーマがかかった母の長い髪の毛は、いつもよりこんがらがっていて、服はいつも気をつかっているのに、慌ててガウンをひつつかんだって格好だし、化粧はしていなかった。いくらお化粧をしなくても、髪がこんがらがってても、おしゃれじゃなくても、きょうの母はいつもよりずっときれいな見えた。

「さつき、はやく食べましょう。お話は、後から」

おばあちゃんは、そう言つて立ち止まるわたしたちにお箸と熱々のごはんを配った。

食卓の上には、わかめと溶き卵の味噌汁と、インゲンの和え物、だし巻き卵と、こんがり香ばしく焼かれた手羽元の照り焼きが並

んでいた。

遅めの昼ご飯を食べ終えてから、わたしたちはおばあちゃんの案内のもと、名月院から佐助稲荷神社、銭洗弁財天と家の近くをぐるりと散歩して、バスで鎌倉駅まで行き、鶴岡八幡宮にも行つたけれど大きな銀杏の太木はなかった。後に残されていたのは、大きなその残骸だけだった。おばあちゃんは前からちゃんと知っていたみたいだけれど、黙つてその残骸より上のもうない枝や葉をみるように、ただ広がつた空を眺めていた。

結局その日の夜、わたしと母はおばあちゃんの家泊まることになり、二人で座敷に布団を広げて、眠ることになった。二人で眠る、ということは幼稚園の時以来だから、少し恥ずかしいけれど、おばあちゃんのおかげかわたしと母のそれまでのぎこちなさはなくなっていた。

「おばあちゃんは、きつと悲しいよね。おじいちゃんはもういないし、おじいちゃんを見た銀杏の木はなくなっちゃったし」

わたしは、銀杏の木がたくさんの黄色い葉を落としながら、すさまじい音でどーんと地面に倒れるのを想像した。木は、もらえるだけ養分をもらつたら、葉を落として自分だけ成長して、ずるいと

思っていたけれど、こうしてあんなにも大きい銀杏でも倒れてしまふことがあるんだと思うと、あつけないなと思う気持ちとあんなにも成長させた一枚一枚の葉がとも愛おしくなった。これからは、一枚一枚を尊重して、できるだけむやみやたらに踏まないようにしよう、と思いつながらわたしは布団をぎゅつとにぎった。

「おばあちゃんの誕生日つて、いつだったっけ？」

「えっと、たしか十二月二十九日だよ」

「じゃあ、その日におばあちゃんちに行つて、大晦日もお正月もこつちで過ごそうか」

珍しく積極的な母に少しびびくりしたけれど、わたしはおばあちゃんに聞こえないように、うんうんと何度も頷いた。

「それでね、あや。お母さん、また人形を作つてもいいかな」

いい、いいけど、どうして今それを言うのだろうと思いつながら、わたしはいいよとつぶやいた。

「もちろん、ちゃんと時間は決めるし。もう部屋にもずつとこもらないわよ。ただね…」

「ただ？」

「ただ、お義母さんのこと思つたらね。もう一度、触れるようにしたいって思つたの」

「触れる？」

わたしは、母の言っていることがよく分からなかった。

「そう、触れる。一枚一枚、銀杏の葉を作つて、石畳にふりおとすの。もちろんその上には、大きな銀杏の木があつて、ちゃんとそれを眺める人を作るの」

「その人形つて、おじいちゃんとおばあちゃん？」

そんなこと聞かなくなつて、分かるけれど。でもわたしはまだ母の人形がそんな風になるとは、少し信じがたかつた。

「そう。ご老人を作るのはじめてだからちよつと自信がないけど…」

「ご老人なんかいつたら、おばあちゃん怒るよ」

わたしたちは、笑い声が聞こえないようにふとんに潜つた。そのとき、わたしは今なら聞けるんじゃないかと思つた。ずつと、幼い頃からの疑問。考えたつて、分からなかつた理由。

「ねえ、お母さんは、どうして人形を作る人になつたの。どうして、おじいちゃんみたいに絵じゃなくて、人形なの」

しばらく、母は黙つていた。耳をすましてみても、なにも聞こえない。きつちり閉められた雨戸からは、一寸の光も見えないし、もちろんすすきが風になびく音も聞こえない。

「人形は、触れるから。本物ではないけど、色も形もずつと記憶に忠実にできるし、匂いだつてつけられるの。写真や絵も、もちろん

ん素敵だけど浮き上がってこない。でござしたものもさらさらしたものも、記憶と一緒にで表面上はつるんとしてるのよ。だから、母さんは触れるものを作りたかったの。忘れないうちにもいつでも手で直に触りたかったから」

はつきりとした口調はいつのまにか少し涙声になっていた。母は、一体なにをそんなに忘れたくなくて、ずっと触りたかったのだろう。「お母さんは、なにを忘れたくないの」

わたしは、できるだけそつと、今自分が出せる声の中でとびきりやさしく聞こえる声で言った。なんだかまるで母が自分より小さな子供のように思えたのだ。

「あや、覚えてるかな。一緒に、お墓参りしたの」

まだ少し泣いている母は、さつきからずつと天井をみている。

「お墓参りつて、お母さんの実家の？」

はつきり言つて、よく覚えてない。母の実家は、京都にあつて、小学校の頃はたまに遊びに行つていたけれど、いつも観光ばかりでお墓参りの記憶はあんまりない。

「忘れても無理ないと思うの。父も母も思い出さないうちにしてたから、家では全然話さなかつたし。母さんね、一人っ子じゃなかつたの。歳が十も離れてた妹がいたの。父も母もはじめから子供は二人欲しいつて思つて、十年かけて産まれた妹が父も母もかわいく

て仕方なかつたみたい。それに、沙耶はほんとうにかわいくてね。肌もまつしるで、髪は細くてつやつやしてて。目はどんぐりみたいに大きくて、ばつちりして、ほんとうに人形よりかわい子だったの。わたしは、そんな沙耶に人形を作つてあげた。沙耶は少し喘息もちで、家でしかあそべなかつたから。でも、沙耶は七歳の時、車に轢かれて死んじゃつたの。わたしが作つた人形を抱いたまま」

母は、いつの間にか布団にもぐつて声を押し殺して泣いていた。

でも、くぐもつた小さな鳴咽や咳きは悲しみをずつと浮き彫りにさせた。わたしは、ただ想像するしかなかった。小さくて、やつと産まれたそのかわいい妹を祖父や祖母が母より可愛がつていることや、失つた瞬間のどうしようもない悲しみや落ち込みを。そして、そんな祖父や祖母を見ながら、二重に悲しんでいる母を。

「それから、人形を作ること、人形を可愛がることもなかつた。けど、小さな骨になつて、お墓に収まつて、たまに見る写真ではあまりにもなにもなくなつてしまつたから。だから、わたしは妹の残像を人形で表したの。父や母は、うれしがつたけど。その分、思い出さずにはいられなくなつて、結局土の中へ埋めたの」

母の人形は、そんな理由からできていたのかと思うと、わたしははたして人形をつくるのが母にとつていいことなのか、わからなかつた。もしかしたら、人形をつくることで悲しみを倍増させてい

るんじゃないか、と思う。

「ねえ、お母さん。わたし、触れることがいいとは思わない。だつて、触れたらいつでも思い出して、気持ちはいつもとらわれちゃうもん」

母を否定したくはなかったし、母から人形を離すこともあまりいい考えだとは思わないけれど、わたしはちゃんと過去にとらわれずに、前を向いてほしいと思った。でも、それなら絵とどう違うのかはわからない。絵は、触ったりはできないけれど、画家だつて母のようにもう存在しないものに異常に固執したりする。ただ、触れるとか、触れたいと思う気持ちが幸せかそうでないかによって、作品はまったくちがうのかもしれないけれど。

「うん。あやの言つてること、よおく分かる。だから、母さんももうそういうのはやめたの。…はじめて展示会したときのこと、覚えてるかな？」

母は、しつかりと涙をぬぐつて、わたしの方に向き直つた。はじめての展示会、あのときの人形もやつぱり悲しかった。色遣いはとてもきれいだつたけど、なにかもろくて儂い気がした。でもそのパステルカラーの中でも、ひとつだけ浮いた色があつた。

「薄紅色も、水色も、薄黄色も、あれは昔に作ったものだったの。それは、あやが言うつように気持ちにまだとらわれていたときに作った

ものだけど、またそんなに作品がなかったから、出したの。とらわれていたつて言つたら、結局そうかもしれないけど。悲しいのじゃなくて、とつても幸福なとらわれかたをしたのがあるの」

赤。あの真つ白な会場の中で、唯一とけ込まずに、ちゃんとそこに立つていた人形。わたしは、思い出した。ちいさな小さな人形のニット帽やマフラー。あれは、人形のおまげなんかじゃない。わたしの方が先だつた。

「冬、スケッチしたやつでしょ」

母の答えを待つより先に口が勝手にうごいてた。

「そう。はじめて見る雪にあやはこんなに喜んでくれてるんだつて思つたらうれしくて。それは、触れたいじゃなくて、忘れないように大事に現しておこうつて思つたの。でも、そういうこと言うのはずかしくて、ずっと黙つてたの。自分が人形にされたつて、喜ぶ人もいればいやがる人もいるし。それに、忘れないようにしてたのに、形に残すだけ残して大切なこと、母さん忘れてたね」

そう言つて、母は小さな声で、「ごめんね」と言つたけれど、わたしはもうあやまつてもらわないでも、十分満たされた気持ちになつていた。わたしだつて、忘れていたのだ。どうすれば、またみんなで笑つて暮らせるか、だんだんと分かつてきた気がした。

わたしと母がやつと眠りについたのは、もう夜中の三時頃で、十一時に就寝を言い渡されてから三時間ぐらいつつと話していた。それでも、おばあちゃんは七時に叩き起こしに来て、「いつまで寝ている気だい」から始まり、ぼおつと親子そろってゆっくりと朝食を食べ、なかなか帰りの支度をしないわたしたちに「居着いてもらっちゃ困るよ」と急がせ、それでもやっぱ帰るときはちゃんと笑つてた。

「これからは、一人ずつじゃなくて、三人そろつてじゃないと家へ入れないよ」

おばあちゃんがあんまりにも笑顔で言うから、わたしと母は顔を見合せて笑つた。

結局、駅を出たのは、九時で当然ながらわたしは学校を休んだ。わたしたちは、おばあちゃんが持たせてくれた、どらやきをほおばつて、知らぬ間に眠り、わたしは母に手をつながれるまま新幹線に乗り、ふたたび眠つた。昨日の夜からとても心地よい眠気がさそってくるし、もう一人で迷うことも、誰かに聞くこともない駅で離さぬようにしっかりと握られた母の手にすっかり安心してしまつたのだ。

長野駅につくと、東京よりずっと寒くなつた気がした。ぴんと張つた空気、雲一つない空。一日いてなかっただけに、昨日とまるでちがう。遠くから、おーいという声がして、わたしは母に再びぐいぐいと手をひっぱられた。

ロータリーには、父の茶色の木目模様の車があった。窓からは父が手を振つて笑っている。わたしたちは、走つた。学校はどうでもいいし、本来なら父が仕事なことに関係ない、わたしは父と母と三人であの家へ早く帰りたいかたつた。

きつと、今頃キンモクセイの花が咲いている。庭に足をふみいれた瞬間、あまいあまい香りがわたしたちを包んでくれる。

(二〇一〇年 卒業)